

会合記録 「2024年 春の取材発表講座」

2024. 4. 16



«開催概要»

開催日時	第1回 2024年2月3日(土) 14:00～17:00
	第2回 2024年3月16日(土) 14:00～17:00
	第3回 2024年3月30日(土) 14:00～17:00
開催場所	早稲田大学早稲田キャンパス3号館605教室
主対象	高校生
講 師	木田滋夫 (読売新聞東京本社 編集局教育部次長) 工藤英資 ((株)ベリースペイス代表取締役、元東急エージェンシー)
共 催	早稲田大学公共政策研究所、一般社団法人途中塾

«開催内容»

«第1回» 基礎講座（記者から学ぶ取材の在り方）+取材企画ワーク

日 時	2024年2月3日(土) 14:00～17:00
参加者	高校生と講師・関係者が15名

講師 木田滋夫

前半の 60 分間は木田講師が新聞を主題に講義を行った。最初に、新聞が発行されるまでの流れや、記事には「発表もの」と「特ダネ」の大きく 2 種類があることなど、新聞にまつわる基本的な知識の話があった。それに加え、いくつかの具体的な事例から特ダネの出発点が何であったか、取材テーマを見つける際や取材をする際のヒントなど、木田氏の豊富な記者経験に基づく実践的な話を聞くことができた。



木田講師の講義は参加者の生徒たちにとって良い刺激となり、その後の質疑応答は、参加者から素朴な疑問や質問が次々とぶつけられる活発な場となった。「取材前に事前質問をどのように考えていいたらよいか」という参加者の質問に、木田氏は「逆に事前に取材内容を縛り過ぎず、大まかなものを用意して取材の中で膨らませていくのがよい」と答えた。また、「取材相手の真意を正確に引き出すにはどうしたらよいか」という質問には、「取材時は雑談から入るなど、取材相手がリラックスして話しゃやすい環境を作ることが大事だ」と答えた。

後半では工藤英資[©]のワークシートを使い、参加者それぞれが取材・発表したいテーマを考え、取材や調査の企画を行った。ワークシートを個人で埋めた後には、数名のグループに分かれて参加者がお互いに内容を共有した。そこに木田氏や大学生のメンバーも加わり、自身のテーマを掘り下げる上でどういった対象に取材するのが良いかなどを参加者が相談する場にもなった。講座終了後も、参加者が積極的に講師に質問したり意見を求める姿が見られた。

«読売新聞で紹介»

第1回の内容は読売新聞で記事化された。(24年2月8日付朝刊12面に掲載)

<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/newspaper-at-school/20240207-OYT8T50066/>

«第2回» プレゼン講座 (+中間発表&フィードバック)

- ・2024年3月16日(土) 14:00~17:00
- ・参加者:高校生と講師・関係者が10名
- ・講師:工藤英資

第2回講座では、参加者による中間発表に先立って、工藤講師によるミニ講義が行われた。講義において工藤氏は、「プレゼンの主役は、受け手である」ということを強く説き、その考えに基づいた効果的なプレゼンをするための心構えを参加者に伝授した。プレゼンをする際、記事や企画書を作つてからどう話すかを考えてしまいがちだが、この順序は逆であるべきといった話もあり、プレゼンに対する意識を変えさせられる講義であった。



講義後には、参加者一人あたり6分間の発表時間+4分間の質疑応答で、中間発表を開催した。中間発表終了後には、工藤氏から参加者それぞれにフィードバックがあった。聴衆ではなく、プレゼンのスライドに向かって話してしまっている参加者が多かったり、人によっては最終的に伝えたい点が何か見えにくい発表となったりした。中間発表では、プレゼンの仕方や発表内容はまだ荒削りな部分が残る参加者がいた。

«第3回» 最終発表+審査・表彰

- ・2024年3月30日（土）14:00～17:00
- ・参加者：高校生と講師・関係者が10名
- ・審査員：木田滋夫 工藤英資

最終回となる第3回の講座では、参加者による最終発表が行われ、第1回と第2回の講座で講師を務めた木田氏と工藤氏の2名が審査・講評を行った。参加者一人あたり10分間の発表時間+10分間の質疑応答と、中間発表より長めに設定し、『野外キャンプによるコミュニケーション力の向上』、『生物多様性保全を解決に導くデザインの新たな可能性』など、取材発表のテーマは多様で、どれも参加者それぞれの興味関心が反映されたものであった。発表後には、参加者や審査員から次々と挙がった質問により、発表で示しきれていなかった取材や調査の過程や結果、そこからの学びなどを会場全体で共有することにつながった。

第2回講座でのプレゼンについての講義や中間発表でのフィードバックを参考にして、発表内容やプレゼンを練り上げた参加者が多く、中間発表に比べて全体のレベルが大きく向上した。ある参加者は、中間発表の時点で、テーマ設定が曖昧かつプレゼン内容も調査内容の羅列になってしまっているという指摘を受けていたが、最終発表においてそれらに改善が見られ見事に優秀賞を獲得した。

中間発表以降に取材を行った参加者も複数おり、発表の説得力が格段に増していった。参加者それぞれが、設定したテーマに合った人物に取材を行うことが出来ていた。中には、駅前で街頭取材を行い、そこでの街の人の意見を分析した上で発表に組み込む参加者がおり、先への期待が大きい。





«審査結果»

«優秀賞» 2名

『発達障害児と定型発達児の隔たりがない環境を作るには』

(白梅学園→慶應大学)

『修復的司法の可能性』(淑徳高校 2年)

«参加賞» 4名

『野外キャンプによるコミュニケーション力の向上』

(フェリス女学院中学 3年)

『生物多様性保全を解決に導くデザインの新たな可能性』(駒込高校 2年)

『多様性社会におけるピクトグラムの使用と意義』

(日本女子大学附属高校 2年)

『若者の政治意識の向上と主権者教育改革』(ルークス高等学院 2年)



«参加者の声»

【感想】

Aさん

「お二人のプロの方のお話を聞けて、とても参考になりました。また、講評を細かく個人にしてくださったので、参考になりました。」

Bさん

「第1講では取材のやり方やまとめ方を1から教わることができ、第2講ではプレゼンに対し、色々なアドバイスをいただくことができ、自分の発表に対する姿勢が変わりました。まだまだ自分のプレゼンに対し満足できていないところがあるので今後、修正していきたいと思います。」

Cさん

「インタビューや自分の取り組む内容を精査する機会がないのでいい勉強になった」

【今後やってほしいこと】

Dさん

「2回のプレゼンをそれぞれ異なる分野で取材して発表する形であれば同じプレゼンを聞くことがなく、聞き手が新鮮な気持ちで、プレゼンを聞くことができると思いました。」

Eさん

「プレゼンではなく、ニュース記事を書くこともやってみたい。」

Fさん

「実際に、取材をしている時のアドバイスもほしい」

作成者：山岸憲伸（早稲田大学4年）